# 野盗伝奇

松本清張

中公文庫

中公文庫


野盗伝奇（やとうでんき） 改版

定価はカバーに表示してあります。

1974年 4 月10日初版発行
1997年11月 3 日改版印刷
1997年11月18日改版発行

著 者 松本清張（まつもとせいちょう）

発行者 笠松 巌

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)



©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Nawo Matsumoto



本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202981-3 C1193 Printed in Japan



乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

# 野盗伝奇

中央公論社

目次

所望 7
砦 20
髪 31
破約 47
影 56
会った人 66
雲切組 78
夜の森 86
藤乃 96
乱波遭遇 106
婚礼異変 119
襲撃 127

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

走路 140
獣 153
新しき頭領 168
取引 182
山塞煩悩 192
意地の女 208
女人交換 226
二つの場合 237
雲十郎の恋 249
杖突峠 263
決闘 273
勝敗 289
新生 303
解説 尾崎秀樹 309

# 野盗伝奇

# 所望

秋月伊助の言葉で四人いた同輩が四人とも、顔色を変えて彼の方を睨みつけた。
「秋月。何と申した。よもやこの場の座興ではあるまいな。座興でなくばもう一度申してみよ」
そのなかの年がさの一人が、みなの気もちを代表するように眼かどを尖らせて言った。
「おう、言うてやる。ご家老の娘御はわしが貰いうける。それだけの働きをわしはする。こう申したのじゃ。貴公らもつんぼであるまいから三度は言わぬ」
秋月伊助はそう言うと、細く鼻筋の通った白い顔に、うすく笑うような蔑みの色を友だちに見せた。
「聞いた。たしかにこの耳に聞いた」
朋輩も負けずにせせら笑いをうかべて言い返した。

「ご家老千野兵部殿の息女美世どのは為賀又五郎に縁づくとの噂がある。又五郎の父御の源兵衛どのも当藩の重職じゃ。おぬしが美世どのになんぼ横恋慕したとて歯の立つことではないわ」

それには伊助は、かたちのいい鼻を、ふんと鳴らしただけだった。

「それとも、おぬしが美世どのをせがむ程の働きとは、どんなものか聞きたいものじゃ」

「余計なことよ」

と伊助は即座に弾くように答えた。

「そりゃおれの働きですること、貴公らと談合することはない。おれだけの才覚じゃ」

若い者ばかりだったせいか、なに、とすぐに殺気立った空気になった。

一つは話題がそうさせた。兵部の娘の美しさは若者たちの関心をあつめていた。誰も彼女に心を寄せている。家老同士、両家の縁組みは仕方がないが、横から同じ身分、同じ朋輩が手を出すと腹が立つ。いや、内心誰でも思っていることを伊助が横着にも臆面もなく言い出したのが疳に障った。

もう一つはこの秋月伊助という男が何となく皆の気に入らなかった。彼の黒瞳のかった涼しげな眸と締まった唇の整った顔つきが、まず皆の感情に不平だった。それから彼の顔つきに似ぬ、どこか横着げなものの言い方も日ごろから腹に据えかねていた。

「どれ、帰ろう」
いまも伊助は、もち前のその横柄な言い方をすると、皆の存在など歯牙にもかけぬ風に立ち上った。
「あいつ」
と残った者の中には、この友人の屋敷を人もなげに出て行く伊助の後姿を追って、咎めようとする者もあったが、誰かがとめた。
「あいつ、今に笑いものになる。まあ、見ておれ」
年がさの男が舌打ちしたあと、憎々しそうに吐いた。
信州高島藩の諏訪因幡守頼水の家中だった。関ヶ原の戦が去年あったばかりの年の春である。

諏訪家は信濃の名家である。遠い祖先は源氏だが、戦国時代、諏訪頼継のころには信州に小笠原、村上などの諸豪と覇を争った。
頼継は不幸にして武田信玄に亡ぼされたが、頼忠のときに回復した。以後、徳川家に忠勤をはげみ去年の関ヶ原の戦には中仙道を打って上った功により、本領の諏訪郡を賜って二万石を領している。要するに、諏訪家は、もとの古巣にかえったのだが、その長い留守

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

の間に、武田の恩顧をうけた諸豪族がはびこっていた。
諏訪頼水は高島城にかえったが、まだこの豪族どもの勢力を一掃したというまでにはなっていない。
かれらは表面は諏訪頼水に帰順を装っているが、何か隙があれば、いつ反逆するか分らないのだ。
そのなかでも江良丹後が一番強大な勢力をもっていた。
江良は高島城の東の北山に砦をきずいて、部下五百を擁している。北山は山岳が波のように折り重なっている要害の地にあった。
かれは、表面は諏訪頼水の被官となっているが、実は高島城に対しては小さな敵国となっていた。
その証拠に一度も高島城に出てきて、頼水に謁したことがない。諏訪の方から、
「早々に出で候て、主君にお目通りなされ」
と誘っても、
「所労でござれば、今暫く先に延ばさせ給え」
といって、言うことを聞かない。
その心は、

（どうだ、討てるものなら、討ってみよ。一泡ふかせるぞ）

と言わぬばかりである。

諏訪頼水は、とうからこれを苦にしていた。江良丹後を何とか始末しなければならない。然し、彼の北山の砦に掛るには、少くとも二千以上の兵力が必要だ。それでも江良に圧勝出来るかどうか疑問である。

江良丹後は強力無双で、自分から三十人力と誇っている。真赧な顔をし、鉄牛のような体格をしていて、それを自負している。

「諏訪めは、おれには手が出まい」

と嘲笑している。

頼水は、この頃、少し焦慮ってきた。いつまでも江良丹後をそのままにしておいては国中の仕置のしめしがつかない。

といって、ヘタに討伐に行って失敗しようものなら、他の群小の豪族の侮りをうけて、彼らが蜂起する。

そうなれば家康からどのような咎めを受けるか分らないのである。

「困った」

更によい策がなかった。家老の千野兵部も、頼水の相談をうけて弱り果てていた。

今晩も、わが屋敷で、その悩みのために浮かぬ顔をしていると、
「申上げます。御家中の秋月伊助さまが、御家老さまに夜分ながらぜひお目にかかりたいと見えております」
と取次が言った。
千野兵部は、秋月伊助という家中の若侍を日ごろからあまりいい目で見ていなかった。若いくせにどこか人もなげな態度が見える。ことに身分の上の者に対して、そうであった。
それで伊助が座敷に入ってきて、平伏したのを見ると、兵部は、
「伊助か。今ごろ、何じゃ？」
と無愛想な声できいた。
伊助は夜分に訪問したことを、まず詫(わ)びた。兵部はそれには鷹揚(おうよう)に聞いて黙っていた。
すると伊助も、それなりに黙ってしまった。両手を両の膝の上に置き、さしうつ向いていつまでたっても、ものを言わない。
――おかしな奴。
兵部は、そう思ったから、
「用を早う申せ」
と不機嫌な声で言った。

それにもすぐには伊助の声は出なかった。明らかに舌打ちしそうな焦燥が兵部の心を乱しかけたとき、

「ご家老」

と伊助が、はじめて顔を上げて呼んだ。面上には少しも感情が出ておらず、黒っぽい眼にも動きはなかった。

今までこの屋敷に伺いに来た数多くの部下の態度とは少々様子が違っていた。兵部は気持の上に少し圧迫を感じた。

「江良丹後を殿が成敗なされる御所存、まことでございますか？」

伊助はそう訊いた。

「そんなこと、おれは知らぬ。殿の御了簡じゃ」

兵部は、まずはね返した。

「丹後がことは殿も目にあまる筈、ご威光にもかかわること故、お手前様も御勘考がありそうな」

伊助は動じなかった。

「左様なことに、そちの口出しを受けぬ。先役の御重職方と、不肖ながら某との談合によって万事の方寸をきめ、殿の御指図を頂く。伊助、余計な差出口はならぬぞ」

兵部は叱った。

「これは恐れ入りました」

と伊助は眉も動かさない。

「しかし、微禄でございましても、某も御当家の一人。お家のおためを思う真心には、どなたにも劣りませぬ。またお叱りかと存じますが、このまま江良丹後を放っておきますときは、御当家に仕置があって無きが如く、丹後めは愈々増長し、外からは嗤いをうけましょう。恐れながら、某が殿のお心持をお計りいたしますに、殿には丹後めをお討ちになりたい肚は山々ながら、結局、お家にその人が無いから延び延びとなっているものと心得ます、そこで、某が夜分を憚らず参上しました訳は……」

伊助はここで言葉を切って、兵部の顔を下から睨み上げるように見て言った。

「某に江良丹後の討手を仰せつけ下さるよう、殿にお頼みを願いに参りました」

聞いている千野兵部が吐く息をとめた。

「その方が江良丹後を討つと申すか？」

千野兵部は眼をむいて秋月伊助の細い鼻筋のあたりを、あきれたように見た。

「左様」

そよとも風が吹かぬように、動じる色が無い。

「必ず討つ自信がございます。殿のお許しをお取りなし下さい」
兵部は眼尻を少し嘲(あざ)けるように笑わせて、
「討手は、そちと誰々が出向くのじゃな？」
ときいた。こんな男と一緒になって莫迦(ばか)な奴もあるもの、という訊(き)きかたである。
「手前ひとりでございます」
「何？」
と兵部は耳を立てた。
「手前だけでございます」
伊助は押すように同じ言葉を重ねた。
「その方ひとりで丹後を討つとのう？」
急に憎悪の感情が兵部の胸にこみあげた。こやつ、という気になった。こちらが莫迦にされたようになった。
兵部は考えた。一体、この秋月伊助がどれほどの腕をもっていたか。家中の若い者の噂はよく聞くが、ついぞ伊助が勝(すぐ)れた使い手という話を聞いたことがない。もっとも弱いということも聞かないから、要するに中どころの目立たない存在なのであろう。
それで、因幡守頼水はじめ、重臣どもが手を焼いている江良丹後を、ひとりで討ちに行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com